

# 静岡・志太榛原

本真北部を通過するリニア中央新幹線の開発をテーマに、環境や地域住民の生活への影響を考察した論文を執筆した。静岡大(静岡市駿河区)に通う社会人学生。浜松市天竜区出身。28歳。

「執筆のきっかけは。」

「仕事の関係で市内各地に出向くことが多く、過疎地域の住民とも交流を持った。そこで、地域開発や静岡の将来に関心を持ち、リニア開発が与える影響を考えたと思った」

「問題意識は。」

「開発の負の部分。世間ではリニア開発への期待や

リニア開発をテーマに研究

いけだ やすあき  
**池田 康明** さん

(静岡市駿河区)

## この人



メリットが話題になるが、開発地域の自然環境や周辺に暮らす住民への影響には関心が薄いと思い、掘り下げて研究しようと思った」

「研究で印象に残っていることは。」

「静岡市北端の南アルプスユネスコエコパークへ現地調査に行き、今後どのよ

うな開発が行われるか説明を受けた。整備されていない道を進んでいくと手つかずの自然が残っていて、ダム開発時代の名残を感じた。大井川の流量が減れば下流に住む多くの住民にも影響が出るのではないか。無関心ではいけないという思いを強くした」

「今後の活動は。」

「地域開発をテーマに卒業論文を執筆する予定。卒業後もリニア開発を注視しながら勤務している会社を通じて、地域貢献活動をしたい」

趣味はカメラと料理。



先日、静岡市の中山間地域「オクシズ」、藁科川上流の湯ノ島地区取材に行った。地区は水道が整備されていないため、住民たちは集落や各世帯で山中の沢などから水を引き、タンクにためたり、ホースで直接家に水を引いたりして生活用水を確保している。

実態が気になり住民に話を聞くと、天候や災害

### 「オクシズ」の湯ノ島で

に左右されるのが当たり前だという。昨年末は雨が降らず、水不足で断水一歩手前だったという世帯もあった。印象的だったのは、記者を市の職員と間違えて「何かやってくる住民のか」と尋ねてくる住民がいたことだ。

水道という生活インフラの「当たり前」が、静岡市でも死活問題になる地域がある。「水とともに生きている」という住民の声が響いた。

(社会部・吉田直人)

# 南アルプス壊すリニア



発生土置き場予定の燕沢付近を調査する学生たち＝11月10日、静岡市葵区

JR東海が強引に押し進めるリニア中央新幹線計画。南アルプスをトンネルで貫く現場を静岡大学の学生たちが現地調査しました。そこで学生たちが見たものは―  
東海・北陸信越総局 伊藤幸記者

## 静岡大生が現地調査

「この自然を壊していいのかわからない。現地を訪れた学生たちは口々に語りました。現地調査(11月中旬)したのは静岡大学・人文社会科学部の川瀬憲子教授のゼミで夜間に学ぶ20〜70代の学生たち。ゼミの共同論文でリニアを取りあげます。リニア新幹線を考える静岡県ネットワーキングの林克(かつし)共同代表が案内しました。全長約25キロのリニア南アルプストンネルは、山梨、静岡、長野にまたがり標高3000メートルの山岳地帯を通ります。学生らは標高1400メートル

## 地域発

リニア中央新幹線 JR東海が建設主体となり、2027年に品川一名古屋で先行開業させ、45年に大阪まで延伸させる計画。環境に深刻な影響を与えるもので、環境省も「環境影響は枚挙にいとまがない」という意見書を出しています。品川一名古屋ルートは86%が地下トンネル。大量の残土の処分、水枯れなど指摘されています。ルートには糸魚川―静岡構造線など有数の活断層が多くあり、地震直撃のときの安全上の問題もあります。

## 大井川の水源地分断、発生土で沢埋める 生活、治水に悪影響

静岡市最奥の登山基地・二軒小屋へ。リニアトンネルは、山深いこの大井川最上流部を貫いていきます。

### 毎秒2ト減る

地下水脈を分断する工事で、JR東海は大井川の水がこの付近で毎秒2ト減ると試算。生活や工業、農業用水として利用する流域の自治体の住民への影響、自然環境破壊が懸念されます。

林さんは、二軒小屋近くの田代ダムをめぐって大井川下流の住民が「水返せ運動」を起した歴史を説明。「この運動で住民は毎秒0.43トの水を取り戻しました。下流の元市長は、2ト減ると簡単に言ってもらっては困る」と怒っていた」と報告しました。

「どうこうと音をたて流れていく大井川の水。大学4年の女性(53)はこの水でみんなの生活は成り立っている。けれどそれがどんな規模で変わってしまうのかを現地に来てみて実感した。生活への影響が心配」と語りました。

JR東海は、掘削により大量に出る地下水を11.5キロの導水路トンネルで下流の樫島(さわらじま)に戻すといいますが、しかし「全量に戻す」ことなどを求める県や下流の利水者との協定は結ばれないまま。この状態での工事発注に県も流域自治体も強く反発。水が戻らない上流の生態

系への影響も深刻です。

### 土砂崩れの跡

静岡県内の工事が出る発生土360万立方メートル(東京ドーム約3杯分)は平たんな燕つばくろ)に積み計画です。林さんが「幅数百メートル、約65メートルの高さになる」と紹介すると驚きの声があがりました。

大井川が増水したときの水の逃げ道となっていた燕沢に発生土を置けば下流に影響が出る。林さん。「燕沢の対岸の山々は地すべりがおきやすくて、崩落すれば川をせきとめてダムができ、決壊すれば下流の樫島(登山基地)を覆う危険がある」と指摘しました。

土砂崩れの跡が幾筋もみられる対岸の山を見あげ、学生たちから「なぜここに土を」との声がもれます。

千石非常口(作業用トンネル坑口)の予定地では、林さんが「ここから燕沢まで発生土を運ぶダンパがものすごく量で通ることになる」と説明しました。

大学3年の男性(28)は「これだけの自然を破壊するのに、県民に知らされないまま事業が進められることに疑問を感じる。3000メートル級の山の下を掘ることは危険も大きい。そこまでしてリニアを推進する意味ってなんなんだろう?」。

別の大学3年の男性(20)は「初めて南アルプスに登ったが想像以上にきれいで、この自然を後世に残したいと思った。リニアの問題はほとんど知らなかったが、今の計画のままでもいいのか疑問。さらに勉強したい」と語りました。

